

---

together

伸縮自在

---

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

together

### 【Nコード】

N6444D

### 【作者名】

伸縮自在

### 【あらすじ】

猫が死んだ。そのことで鈴は「生きる」ということを拒否しようとするが……。

校舎裏の脇道。

そこは鈴と猫たちの憩いの場だ。

今日もまた、鈴は猫と共にそこにいた。

しかし今日に限って言えば、決してそこは憩いというべき場ではなかった。

「ぐるーみー。ぐるーみー」

響くのは鈴の歌声。

その声はお世辞にも上手いとは言えるものではなかったが、それでも現在鈴の手元に収まっている者にとってはいわば母の子守唄のようなものだった。

ごろごろと喉を鳴らし、目を細め、気持ちよさを表現する。

心臓の鼓動は膝を介して伝わってくるのに、その声はすでに頼りない。

それは現在鈴の膝元に収まる猫、デカメロンの死期が近いことを示していた。

デカメロンは恭介に拾われてきた猫だった。

彼女——デカメロンは雌なのだ——は拾われてきたときからすでに老体で、いつそのときが訪れてもおかしくないような様子だった。「どうしてこいつを拾ってきたんだ」

「だってかわいそうだろ。道端でにやあにやあ鳴く声もか弱くてさ」

鈴の問いに対して、恭介はそう答えた。

「おまえ、アホだな」

そんな恭介に鈴はこう言った。

そうして拾われてきてから早二ヶ月が経ち、そのときはやってきた。

「きもちいいだろ」

微笑む鈴。その顔はまるで子供を包み込む聖母のようだ。

声に答えるようにして、デカメロンが喉を鳴らす――  
そう思われた数瞬の間で。

デカメロンの声が止んだ。

「デカメロン？」

鈴の呼びかけに答える声はない。

静寂。

静けさに気をとられた鈴は気づくことができなかった。

その異変に。

デカメロンの心臓の鼓動が、すでに伝わってこないことに。

「……………」

そつと。

鈴はそつとデカメロンの身体を抱いた。その身体は徐々に体温を失っていき、やがて生の抜けた形骸と化した。

二時間ほどして鈴は戻ってきた。

僕はその間ずっと落ち着かずにいた。

だから鈴が戻ってきたときはすぐくほつとした。

「終わった？」

果たしてその言葉が正しかったのかは分からないけれど、鈴は黙って首を縦に振った。

チリン、と髪についている鈴が鳴る。

その音が今は、ひどく空虚なものに聞こえた。

「おかえり」

「……ただいま」

部屋の中へと鈴が上がりこんでくる。

そして僕の向かいにちよこんと座ると、

「なあ、理樹」

と呟いた。

「な、なに？」

鈴の声は僕でさえ聞いたことがないくらいに神妙で、少し動揺してしまった。

見ると、鈴はなにやら難しい顔をしていた。たぶんこれから言うであろうことを頭で反芻しているに違いない。

一瞬の間。そして、

「……死ぬって、なんだ？」

「は？」

そのときの僕はたぶん、これ以上ないほどにバカみたいな顔をしていただろう。

だって鈴の口からそんな哲学的な話が出るだなんて、思ってもみなかったから。

「だから、死ぬって、一体なんなんだ。どうして生き物は死ななくちゃいけないんだ。そんなの悲しいだけじゃないか」

「それは……そうだね」

けれど僕は、それしか言うことができなかった。鈴の期待に沿うような知識も言葉も、僕の中には備わっていなかった。俯いてしま

う。  
「さっき、デカメロンが死んでしまって、あたしはものすごく悲しかった」

「うん」

「そこで思った。誰かが死んでしまうのはこんなにも悲しい。もうめちゃくちゃ、いやくちゃくちゃに悲しい。けれどそれでも、生き物はみんな生きている。いつかみんな死んでしまって、それでまた誰かが悲しむのに、死んでしまうと分かっているのに、どうして生き物は生きているんだ」

その言葉は、ひどく僕を悲しませた。

鈴が自分の考えを持つのは良いことだ。けれどそれがこんな形でなんて、こんな悲しい言葉を聞かされるなんて思ってもみなかった。だってそれじゃあ、鈴は生きるということを否定してるみたいじゃないか！

ふと、鈴の顔が見たくなかった。一体鈴はどんな顔で、あんなに悲しいことを言っただろう。

「――っ」

僕は息を呑んだ。

鈴もまた、悲しそうな顔をしていた。

泣きそうなの、でも泣けないという意思がそれをさせまいとするよな、そんな顔。

「もう……」

鈴の声は弱々しく、今にも空気に溶けてなくなってしまうそうだった。

「もう、嫌だ。あんなに悲しい思いは、もうしたくない……したくないんだっ！」

弱音を吐く鈴の姿は、ただただ沈痛なものだった。

次の日。

「西園さん、ちょっといいかな？」

「構いませんが……なんででしょうか？」

結局僕は鈴の質問に答えを出すことができなかった。

だからこうして、西園さんのもとを訪れたのだ。

西園さんだったら、きっと答えを知っている。そんな気がしたから。

「実は……」

僕は昨日の出来事、鈴の様子、鈴の意見、そしてそれによって悲しんでしまっていること、だから鈴を助けてあげたいことなどを、詳細に話した。

西園さんはそれらを興味深そうに聞いていた。だから僕は、期待してしまっていた。西園さんが鈴を助けてくれることを。けれど。

「残念ですが、その答えをお教えすることはできません」

西園さんは、そう言った。

「私が鈴さんに死とはこういうものだとか教えることはできません。けれどそれは、きっと鈴さんが望むところではないでしょう」

「それは……どうして？」

問うと、西園さんは「はあ」と一つ、溜め息を吐いた。

「これだから、直枝さんのようなゆとりは困ります」

なんだか、小バカにされたような気がする。

西園さんはこほん、と咳払いをすると、

「いいですか直枝さん。鈴さんはなぜ、直枝さんに悩みを打ち明けたのだと思いますか？ リトルバスターズのメンバーはたくさんいるのですから、誰でも良いはずではないでしょうか」

ぴ、と人差し指が立つ。

「いいですか、直枝さん。鈴さんは他でもない直枝さんに答えを求めています。直枝さん、あなただけなんです。その誠意を、直枝さんはどうして受け止めてあげないのですか？」

西園さんの口調は、まるで僕を責めているようだった。

「『よう』ではありません。責めているんです。第一、私に答えを訊くという前提が間違っています。だから、直枝さん。鈴さんの答えは、直枝さんが見つけるべきです」

そうして僕は、丸二日間、悩むことになった。

校舎裏の脇道。

そこは鈴と猫たちの憩いの場だ。

今日もまた、鈴は猫と共にそこにいた。

鈴の隣には僕がいる。

猫たちの動きに合わせて、鈴がころころと笑う。そんな様子を、僕は見つめていた。

どうやら、鈴の悩みは解消したようだった。考えてみれば、僕の答えは簡単なものだった。

（——「僕は、僕自身の意思で、生きている」——）

鈴にそう言ったことを思い出す。

僕は生きたいから生きている。

それは果たして答えになっているかどうか分からないけれど、今の僕に言えることはこれが精一杯だった。

だって、みんながいるから。

みんなと一緒にいると楽しいし、笑いが耐えない。それはきっと、とても幸せなことだと思う。

確かに生き物はみんな、いつか死んでしまう。

けれど、その人——動物でもそうだ——が過ごしてきたものというのは、死によって失われたりしない。

誰かが過去を覚えている限り、その人が存在した証を覚えている限り、それは永遠に生き続ける。

だから僕は、今を生きている。

僕という存在が、みんなの中に残るように。

鈴にとっても、それは同じだと思う。

確かにデカメロンが死んでしまったことは悲しいことだ。

だけどデカメロンという存在は、鈴がデカメロンと過ごした記憶を覚えている限り、永遠に生き続けるものだ。

実際、鈴は今まで一緒に過ごしてきた猫たちのことを、一匹だっ  
て忘れてはいなかった。

きっとデカメロンは、鈴がそのことを知ることができるように、  
運命によって決められていたんだ。

そしてその使命は僕に託された。

だから、僕は決めた。

ずっと鈴の側にいようと。

そして、二人で生き続けよう。

僕と鈴という存在が、みんなの心に刻みつけられるように。

難しいことかもしれない。けれど、なんとなくだけど、大丈夫だ  
という確信がある。

きつとそれは、鈴も感じてくれていることだろう。

僕らは、生きていく。

ずっとずっと、二人で。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6444d/>

---

together

2010年10月8日10時38分発行